

志望校合格必勝は天満宮へ 頼朝の夢に現れた牛に乗る道真

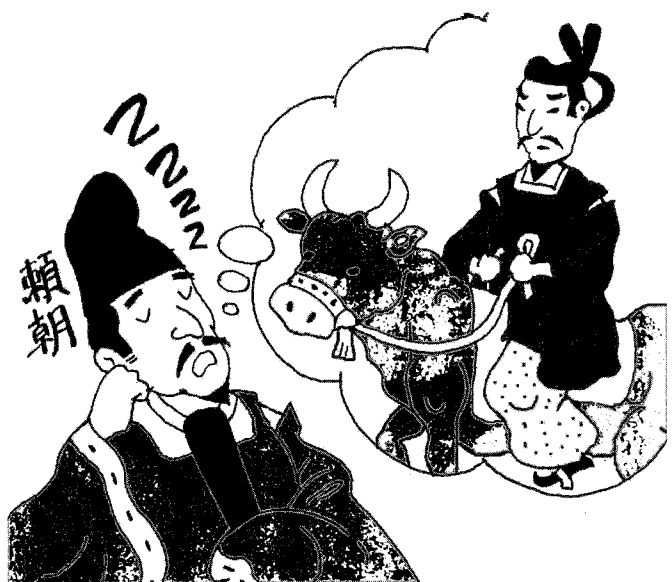
神使しんしという言葉をご存じだろうか。つかいひめ、かみのつかい、つかわしめ、けんぞくなどともいい、諸神仏の使者の意味である。神仏の顕現けんげんに先立って現れ、また神仏の意志の前兆としての行動をとるとされ、多くは神仏に關係のある鳥獣虫魚の類が神使とされる。

八幡宮の鳩、熊野三山の三本脚の鳥かぎ、春日大社の鹿、日吉大社の猿、諏訪大社の鷲さき、稲荷大社の狐、弁財天の蛇、毘沙門天の百足ひかなどが有名である。

神使は人間生活の場の近くにいる動物が多い。

そして、牛を神使とするのが菅原道真をまつる天満宮である。「天神縁起」によると、道真が九州へ落ちていくときにお供したのが牛だったことによるというが、本来は農民が天神に捧げた犠牲獣だったのではないかといわれる。

道真は、幼時から文才に秀でており、十八歳で進士、二十三歳で秀才に合格し、後に文章博士になったため、学業上達、受験合格の神様としての御利益を一手に引き受ける存在となっている。道真は六月二十五日に生まれ、二月二十五日に亡くなったと伝えられるので、毎月



二十五日が縁日となっており、各地の天神様はにぎわいをみせている。

全国には一万二千余の天満宮があるが、東京都文京区春日一丁目に、その名もずばり「牛天神」という神社がある。

社伝によると、源頼朝が寿永元年（一一八二）春、この地に来たとき、夢に菅原道真が牛に乗って現れ、頼朝に二つの幸いを示し、もしかかった時には小社を建てよと託した。夢からさめるとそばには牛によく似た石があった。

不思議に思ったが、同年長男の頼家が誕生し、翌年平家が滅亡した。

その御礼に元暦元年（一一八四）天神をこの地に勧請かんじょうしたという。今も牛石といって、その石が境内に残っている。